

大谷探検隊員・柱本瑞俊資料と明覺寺資料

— 京都、桃源山明覺寺資料調査の現状報告 —

白 須 淨 眞

(2013年10月3日受理)

Hashiramoto Zuishun, a Member of the Otani Expeditionary Party, and Meikakuji Data
— A status report on the investigation of Kyoto Tougenzan Meikakuji Data —

Joshin Shirasu

Abstract: Hashiramoto Zuishun (1888-1958) was a member of the Otani Expeditionary Party, an investigation party which Otani Kozui dispatched to a wide area of Asia in the early 20th century. However, there are so many things researchers on the Otani Expeditionary Party don't understand about him. In 2012, I investigated the data of Meikakuji in Kyoto where he was the 17th chief priest. The investigation revealed the following results:

i) Hashiramoto Zuishun formerly named himself Ama Akira; ii) He was born to Shouuji in Kajiki of Kagoshima; iii) His investigation in India was conducted twice, the first from 1907 to 1909 and the second from 1909 to 1910.

Key words: Otani Expeditionary Party, Otani Kozui, Hashiramoto Zuishun, the data of Meikakuji

キーワード：大谷探検隊、大谷光瑞、柱本瑞俊、明覺寺資料

1. 資料調査に到る経緯

柱本瑞俊（はしらもと・ずいしゅん）は、第二次大谷探検隊（1908～1910）¹⁾のインド隊員の一人であった（挿1）。上原芳太郎が編集した大谷隊の記録『新西域記』上巻（1937）に、「印度随遊小記」と題する調査報告を寄せた人として、彼の名は、大谷隊の研究者にはつとに知られていた。しかし、彼がどのような経緯で大谷隊員に抜擢され、どのような調査活動を展開したのか、その詳細は明らかではなかった。情報が少なかったからである²⁾。

こうしたなか柱本瑞俊に係わる確かな情報の必要性を痛感したのは、英国王立地理学協会の機関誌“The Geographical Journal”の1910年4月号のアジア欄に‘Hashiramoto’の名を確認し、加えて新たに見出した資料「外務省外交記録」のなかにも「柱本」の名を見

出したからである。‘Hashiramoto’は、1910年、英領インドからの内陸アジア探検活動を英国インド政庁及び英国に拒否された光瑞が、新たに練り上げた探検計画のなかにカシュガル方面に向う隊員として、また「柱本」は、第三次大谷隊員・橘瑞超が探検途上に窮状を訴える書簡を宛てた人としてそれぞれ登場する³⁾。なお後者の書簡は、外務省外交史料館に現存する。辛亥革命（1911～1912）によって中国国内の通信が混乱するなか、橘から依頼を受けた在カシュガル英国総領事のマカートニが、1911年12月10日付で、北京の在清国伊集院公使に郵送し、それを伊集院が公信に付して外務本省に届けたからである。

さてこれらの情報の確認は、柱本瑞俊が、第二次大谷隊のインド調査だけでなく、その後の探検計画の中にも登場し、また第三次大谷隊の橘が窮状を訴えるに足るポスト、つまり彼が大谷光瑞に極めて近く、西本

願寺の要職にあったことを推定させるものとなった。したがって柱本は、大谷隊以後も西本願寺の中樞にあった人物として視点を当てるべき人物として新たな課題が生じてきた⁴⁾。大谷隊に係わる外務省外交資料の紹介や研究論考のなかで柱本瑞俊にしばしば触れていったのは、そのためである。

こうしたおり、研究論文集『大谷光瑞とアジア』の刊行を企画していた新潟大学の柴田幹夫氏から、「柱本瑞俊のお寺・明覺寺に、資料調査をお願いします。」という、熱心なお誘いをしばしば受けた。こうして私の新課題は、柴田氏が意図する大谷隊以後、つまり大谷光瑞が西本願寺を去って以降の光瑞の海外活動とも連動するものとなった。柱本瑞俊もその光瑞の海外活動に直接参画し、深く関与していたからである。そして先に述べた「Hashiramoto」と「柱本」に係わる情報も収録した拙著『大谷探検隊研究の新たな地平—アジア広域調査活動と外務省外交記録—』を印行し贈呈した2012年夏、明覺寺第20世・柱本めぐみ住職から、「お蔵の物を出してみました。資料整理をお任せしたい。」との嬉しい知らせを受けることとなった。こうして、柴田幹夫、白須、白須ゼミの院生⁵⁾を中核として共同調査を開始することとなった。これが明覺寺第17世住職・柱本瑞俊の資料調査へ到った経緯である。

2. 桃源山・明覺寺と明覺寺資料

桃源山・明覺寺は、1490年、摂津国島下郡柱本郷(現、高槻市柱本)に創建されたと伝えられる長い歴史を持つ浄土真宗の寺院である。その寺史の概要は、明覺寺第18世・柱本照映住職の『桃源山 明覺寺誌』(2002)によって窺うことができる。これによれば当寺は、1896(明治29)年、現在の境内地(京都市下京区新町通正面下ル783)に移るまでは、三百年間も西本願寺



挿1 安満星(あま・あきら、後の柱本瑞俊)

写真背面の書き込みによれば、インド調査時の1908(明治41)年12月20日、ボンベイ(現ムンバイ)で撮影したもの。安満星は、1908年に改姓、1909年に改名して柱本瑞俊となった。なおここに言うインド調査とは、第二次大谷隊のインド調査に先行する調査を指す。写真は、明覺寺・柱本瑞俊資料より。

境内地のなかの阿弥陀堂の前にあったのだという⁶⁾。こうした西本願寺との深い関係の詳細は不明としても、当寺の歴史が、西本願寺が現在地・堀川六条に寺基を移して以降、極めて緊密な関係を保ちながら展開していたことは想像に難くない⁷⁾。したがって明覺寺資料を扱うに当たっては、こうした当寺の歴史は承知しておくべきであろう。ただ現時点の調査状況から判断すれば、明覺寺資料は、江戸期に遡るものは限られており、その多くは、明治期以降のものが大半と思われる。しかし土蔵に残されているまだ未調査の資料群もあり、最終的な判断は今後委ねるしかない。

さて明治期以降の資料群のなかには、第16世・瑞雲(1858~1912)と第17世・瑞俊(1888~1958)の両住職に係わるものがその大半を占めている。今回の調査の最大の目的は、第二次大谷隊に加わり、大谷隊以降も大谷光瑞の海外活動に関与した第17世・瑞俊の資料を求めることであるから、その作業を優先する。ただしそれは、混在する資料群のなかから瑞俊関係のものをピックアップすることであるから、他の資料もおおのずと目を通すことになる。「4. 資料整理の展望」に柱本瑞俊関係資料とともに他の資料を内包させたのは、現時点で注視すべきと判断したものである。

3. 柱本瑞俊とその生涯

明覺寺の第17世住職となった柱本瑞俊は、もとは安満星(あま・あきら)といった(挿1)⁸⁾。鹿児島県良郡加治木村加治木の性応寺の出身で、生誕は、1888(明治21)年11月28日である⁹⁾。

この加治木の安満姓の性応寺については、かつて「与謝野鉄幹、父・礼厳との南国体験—礼厳、1882(明治15)年鹿児島私信の紹介をかねて—」と題する論考において詳しく触れたように¹⁰⁾、江戸期から明治初期まで真宗禁制の地であった鹿児島における西本願寺の新たな開教と深く関わっている。鉄幹の父・与謝野礼厳は、幕末から明治初期にかけて活動した西本願寺の勤王僧の一人であり、後、鹿児島開教にも従事した¹¹⁾。鉄幹はその父に連れられて鹿児島に赴き、加治木のこの性応寺に移って幼少期を過ごす特異な南国体験をした。鉄幹自身が短編小説『兄』(第二次『明星』9-3)に詳細に記し、また作家・永畑道子が『鉄幹と晶子—歌の革命』(ちくま文庫、1996)の冒頭にも触れたところである¹²⁾。知る人は多くはないが、鉄幹も得度し、西本願寺派の僧侶だったのである。1939(昭和4)年、鉄幹は、妻・晶子とともにこの思い出の地を訪ね、二人はそれぞれ一首を詠んだ。明覺寺資料にもその時の二

人の短冊を見出した¹³⁾。鉄幹は、

老の身の相見て嬉し をさなくて
加治木乃(の)寺に植ゑしたぶの木 寛

と詠っている(挿2)。幼いとき植えた「たぶの木」の成長が、ことのほか嬉しかったのであろう。

星野元貞氏の手になる『性応寺史』(1979)によれば、この加治木の性応寺は、紀州・和歌山の性応寺に由来する。西本願寺の鹿児島開教の開始にともなうて、1878(明治11)年、紀州・和歌山の性応寺の本堂を、海路によって和歌山から鹿児島へ運び、西本願寺鹿児島出張所(後の鹿児島別院)の本堂としたのだという¹⁴⁾。鹿児島開教の拠点である。大変な難事業であったことは、「御建築懸り」の鶴飼源三郎の嘆願書によって窺える¹⁵⁾。当時の和歌山性応寺の住職は、第17代の安満願慧(1852~1893)であった。その願慧も鹿児島出張所註記補書記として当地に赴任して開教に従事した。そしてその後、加治木に移って、性応寺を再興した。

この加治木に性応寺を再興した安満願慧が、安満星の父である。母は、くに¹⁶⁾(国子)といい、紀州和歌山の松原有積の次女である。その姉が西本願寺第21世・明如(大谷光尊)に入室した「お藤の方」である。院号の円明院で呼ばれることも多い。光瑞の実母である。したがって安満星、すなわち柱本瑞俊は、大谷光瑞と従兄弟という関係となる。瑞俊が一回り、12才ほど年下である。明治期、加治木の性応寺が西本願寺と深い関係を持つことになるのは、こうした円明院との繋がりに、紀州の性応寺の南北朝時代に遡る本願寺と



挿2 鉄幹の短冊
明覺寺資料より。

の歴史的な係わりが相乗してのことであろう¹⁷⁾。

安満星は、1901(明治34)年、鹿児島師範学校附属小学校高等科第一学年(現、鹿児島大学附属小学校)を修了した¹⁸⁾。そして京都に向かい、京都府京都市第三高等小学校(京都市東山区六波羅)へ通学した¹⁹⁾。第二学年への編入である。満12才の春である。西本願寺の錦華殿、すなわち大谷家の人々の住まいからの通学であったというから、伯母・円明院のもとにあったことになる。したがって安満星は、その少年期から西本願寺の大谷光瑞とその弟と妹、尊重(後、光明)、尊由、武子(後、九条武子)らと深い接触があったことは疑いない。とくに武子は一才年上で、年齢も近い。円明院が安満星にも、その子供と同様に深い愛情を注いでいたことは、後に言及する安満星の円明院宛の私信の多さとその文面から容易に推察できる。また柱本めぐみ住職によれば、武子が、後のある一時期、明覺寺にも住まいしたこともあったという。武子の画いた日本画(挿8)や武子愛用のものが、明覺寺に見いだせるのは、そのためであろう²⁰⁾。

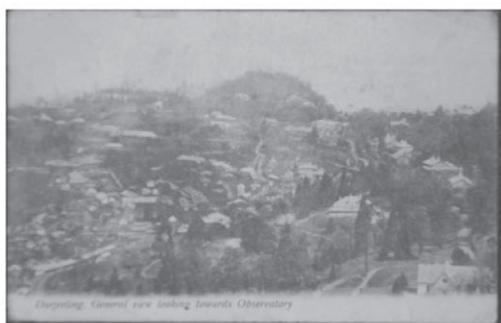
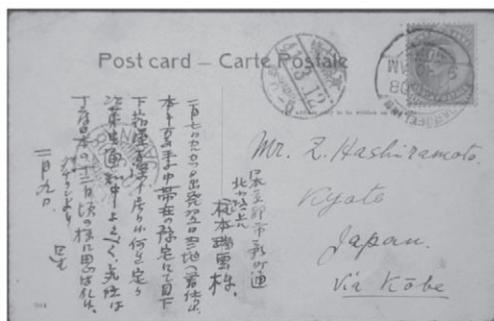
次いで1902(明治35)年、安満星は、開設されたばかりの京都府立第二中学校(京都市南区西九条大国町1の現・京都府立鳥羽高等)に入学し、五年の課程を経て、1907(明治40)年の春に卒業した。大谷光瑞が自らも参画した第一次大谷隊(1902~1904)を派遣していたのは、この京都府立第二中学校に在学中である。そしてその卒業の春から、安満星は、西本願寺に勤め、宗務官僚となった。9月には、「執行所用係」となり室内部への配属となった。そして11月16日、得度して僧侶となった。その時の度牒と衣体許可書も残っている²¹⁾。安満星、20才直前のことである。

ところで、2012年初秋の調査時、'DARJEELING 10 FE.08 9 30AM', つまり、1908年2月10日午前9時30分の英領インドのダージリンの消印スタンプのある柱本瑞雲宛の絵はがきを見出した(挿3)。その文面には、

- 1 二月七日カルカッタ出発。翌日当地へ着仕り候。
- 2 本年夏季中滞在の予定にて、目下
- 3 下宿を探し居り候。何れ定めり
- 4 次第御通知申上くべく。気候は
- 5 丁度日本の十二月頃の様には思はれ候。
- 6 ダヂリンより 星
- 7 二月九日

と書かれてあった²²⁾。「ダヂリン」、つまりダージリンから「二月九日」付で差し出されたものである。「星」

とは、安満星である。得度後、安満星は、室内部の職員のポストのままでインドへ行っていたのである。したがってこの絵はがきは、柱本瑞俊が、第二次大谷隊インド隊のメンバーとしてインド調査に従事する1909（明治42）年の夏よりも前に、すでにインドで調査活動を行っていたことを示している。ただし柱本瑞俊と改姓改名する前の安満星の名で。



挿3 安満星のダーズリンよりの絵はがき

明覚寺・柱本瑞俊資料より。

これによって、1907（明治40）年12月から1909（明治42）年5月までインドに行っていたという柱本瑞俊自身の言は、改姓改名以前の安満星時代を語ったものであり²³⁾、ダーズリンからのこの絵はがきによって間違いのない事実として裏付けられることとなった²⁴⁾。したがって安満星の活動と柱本瑞俊の活動を一体化して認識可能となり、大谷隊の実態研究に、新たなデータを提供できることとなった。

なおこの安満星のインド調査については、これ以外にもいくつかの私信が確認でき、その調査ルートの詳細や、その目的も浮上させることが可能である。詳しくは別稿「安満星（柱本瑞俊）の英領インド調査（1907年～1909年）—安満星の円明院と柱本瑞雲宛私信の整理報告—」によってデータを提供しながら論じることになるが²⁵⁾、その目的の一つを、安満星の円明院宛の私信の文面によって提示しておこう²⁶⁾。

- 31 此の冬、橘・野村に面会出来る事も
- 32 存じ居り候処、先の都合にて来年
- 33 にのびる事と相成り、又私は一人にて
- 34 十一月の末より当地を下り、冬には本園
- 35 の積尊園（涅？）槃地探しに参る事と
- 36 相成り申し候。

これによれば、安満星がインドに向かったのは、「此の冬」、つまり1908（明治41）年冬に「橘・野村に面会」することが、釈迦の泥槃（涅槃、Nirvana）の地を探ることとともに、もう一つの目的であったことになる。この私信に見える「橘」とは橘瑞超、「野村」とは野村栄三郎である。1908（明治41）年6月25日、北京を発った二人は、外モンゴルを含む内陸アジア広域を探查し、カラコルム峠を越えて英領インドに到達した。通常、第二次大谷隊と呼称される調査隊である。この安満星の円明院宛私信が投函されたのは、北インドのスリナガルであり、消印のスタンプの年次は、1908年10月22日である。したがって安満星は、橘と野村によって構成された第二次大谷隊の内陸アジア隊を、このスリナガルの地に出向いて迎えようとしていたのである。ただ「先の都合にて来年にのびる事」となり、合流できなかつただけなのである。安満星がインドに赴いて橘瑞超と野村栄三郎を迎えようとしていたことは、従来まったく知られていなかったことで、重要な事実が浮上したことになる。

いずれにせよこの第二次大谷隊のインド調査に先立つ安満星のインド調査が、大谷隊と連動していたことは疑いない。大谷隊研究に、また新たな情報が追加されたことになる。したがって先の拙著の私見も、第二次大谷隊に係わって安満星のインド行を追加する必要が生じたこととなる²⁷⁾。

また安満星の私信によれば、このインド調査時、彼は、英国からの帰途、アフリカの調査を行った淳浄院（光瑞の二番目の弟・大谷尊重。後に継法に就任した頃に光明と改名²⁸⁾）と、彼に随行していた渡辺哲信（第一次大谷隊の隊員として活動した経歴を持つ人）と会ったことも記されている。このアフリカ行は、すでに1992年、哲信が語っていたこととして触れたことがあるが²⁹⁾、当時、それが淳浄院と行動をとともにしたものであり、この調査が淳浄院の行動としてすでに公にされていたことなどは、まったく気がつかなかった。いずれにせよ当時の西本願寺の活動が、アジア広域調査を越えてアフリカにまで広がっていたことを裏付ける確実な情報がさらに追加されたことになる。それは、大谷隊を含む当時の西本願寺の調査活動の枠組みに対する新たな課題として受け止める必要がある³⁰⁾。

その後、安満星は、1908（明治41）年8月、京都市の明覺寺の第16代住職・柱本瑞雲とその妻・千代の養子となり、柱本と改姓し、1909（明治42）年2月、名も瑞俊と改め、柱本瑞俊となった³¹。21才の時である。

なおこの瑞俊への改名は、1909（明治41）年9月1日付の円明院宛のインドのレーからの私信にも、柱本自身が直接触れているのでその一つを移録しておく。

- 23 申上げ度き事は数限りなく候へども、只今は
 24 此れにて失礼申上ぐべく、追て先日、柱本より私の
 25 実名瑞俊と頂戴仕りし様、承り候。柱本へは
 26 通信常に致し居り候。右まで。匆々頓首。

「柱本」とは、養子先の明覺寺の第16代住職・柱本瑞雲を指す。先にダーズリンからの絵はがきに触れた人と同じである。実名を「瑞俊」と頂戴したことは住職・柱本瑞雲から聞いているというのであるから、門主・光瑞から賜ったということなのであろう。「瑞」は光瑞の瑞字である。

続いて柱本瑞俊は、1909（明治42）年8月27日、第二次大谷隊インド隊のメンバーの一人として、神戸を出航することとなる³²。インドから帰国したその年、再びインドに赴いたのである。そしてインド調査を終えた瑞俊は、1910（明治43）年2月29日、孟買（ボンベイ、現ムンバイ）から、仏国を経由して英国へ向かった。絵はがきなどの私信によれば、さらにドイツ、オーストリア、ハンガリー、イタリアなどを巡り、シベリア鉄道によって帰国の途に就いたようである。現時点で見出しているこの旅行の最後となる絵はがきは、柱本瑞雲宛の1910（明治43）年7月29日付の北京からのもの（挿4）。

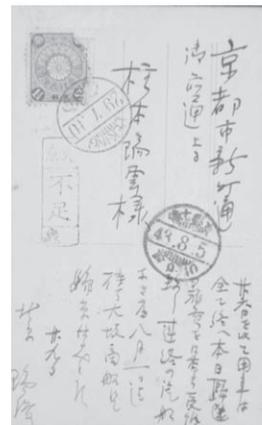
【表】

- 1 廿六日を以て用事は
- 2 全て終へ、本日、帰途
- 3 の旅費を日本より受納
- 4 致し、連絡の汽船
- 5 なき為、八月一日迄
- 6 待ち、大坂商船にて
- 7 帰京仕るべく候。
- 8 廿九日
- 9 北京 瑞俊

【裏】

（右端書き込み）

- 1 七月廿九日、むし暑き



挿4 柱本瑞俊、北京よりの絵はがき

明覺寺・柱本瑞俊資料より。

- 2 北京より帰途を
- 3 報じまつらす 瑞俊

この柱本瑞俊の第二次大谷隊インド隊員としてのインド調査も、別稿「柱本瑞俊の英領インド調査（1909年～1910年）—柱本瑞俊の円明院と柱本瑞雲宛の私信の整理報告—」として、1910（明治43）年2月29日の孟買出帆以降帰国までの間も、別稿「柱本瑞俊、1910年の欧州行」（仮題）として詳細に報告する予定である。

また柱本瑞俊のパスポートも残っている。新潟大学で担当される予定である。肝要となる報告書の類がどの程度残っているかは、現時点では不明であるが、希望を持って探してみたい³³。

1912（大正元）年、柱本瑞俊は、明覺寺の第17代住職を継承し、次いで1913（大正2）年、神戸の大谷光瑞の別邸・二楽荘に併設されていた武庫仏教中学の教員となった。しかし、翌1914（大正3）年、武庫仏教中学の閉鎖とともに解任され、残務委員としてその処理に当たった³⁴。西本願寺疑獄事件に連動した大谷光瑞の本願寺住職・真宗本願寺派管長の辞任、つまり光瑞が西本願寺を出てしまったことに起因するものである。光瑞と関係の深かった柱本瑞俊は、光瑞と行動をともにしたのであろう、1915（大正4）年から1923（大正12）年8月末日までの間の西本願寺の辞令

は、まったく残っていない。それは紛失したのではなくもとより存在しないと見るべきある。というのも、この間、柱本瑞俊は光瑞の海外事業に直接参画していたからである³⁵⁾。その当時の私信もいくつか確認しており、概略しか解らなかつた光瑞の海外事業の様相も、今後の整理によって知られることになる。

なおこの間、柱本瑞俊は、益子(旧姓・若原)と結婚した。1917(大正6)年のことである。

そして1923(大正12)年、柱本は、西本願寺に復帰した。その後、枢密部長・室内部長・法務部長、津村別院輪番、審事局長・会計検査局長などを歴任して退いた。退任後は、自坊の茶室「杏林庵」で療養生活に入り、1958(昭和33)年、「安らかな大往生を遂」げたという³⁶⁾。

4. 明覺寺資料の整理の現状と研究への展望

今まで述べてきたように本報告では、明覺寺の資料総体を「明覺寺資料」と呼称し、その調査の最大目的とする安満星と柱本瑞俊の資料を「明覺寺・柱本瑞俊資料」と呼称した。そこで概観してきた「明覺寺・柱本瑞俊資料」をさらに細分化し、次のような整理研究計画を立てている。

(a)「安満星・柱本瑞俊仮年譜」(「明覺寺・柱本瑞俊資料Ⅰ」)

安満星を含む柱本瑞俊に直接係わる資料は、鹿兒島師範学校附属小学校高等科第一学年を修了した1901(明治34)年3月28日、つまり13才時から、綽如上人五百五十回忌法要の僧綱を勤めた1942(昭和17)年4月21日、つまり54才に至るまでのものを見出した。分散していた修了・卒業証書、西本願寺の辞令の類を一括したものである。すでに述べたように、西本願寺不在の1915(大正4)年から1923(大正12)年の間のものは存在しない。現時点で掌握している資料総数は115点、若干の漏れが想定されるものの、大谷探検隊員に係わってこれだけの資料が揃うのは希有の例である。したがって、これら資料によって、できる限り正確な仮年譜を作成する。この仮年譜は、安満星・柱本瑞俊個人年譜ではあるが、明覺寺資料の個々の年代を想定する際の指標としての役割も期待しての作業である。「仮」とするのは、調査の進展によって追加資料が加わることを想定してのことである。大部なものとなるので、分割して公にする。

なおこの年譜作成に用いた資料群を「明覺寺・柱本瑞俊資料Ⅰ」とする。

(b)「安満星(柱本瑞俊)の英領インド調査(1907年～1909年)―安満星の円明院と柱本瑞雲宛の私信の整理報告―」

先に触れたように、安満星が、第二次大谷隊のインド隊員として英領インドを調査する以前の単独調査を円明院や柱本瑞雲宛の私信によって整理したものである。

(c)「柱本瑞俊の英領インド調査(1909年～1910年)―柱本瑞俊の円明院と柱本瑞雲宛の私信の整理報告―」

これも先に触れたように、柱本瑞俊の、第二次大谷隊のインド隊員としての英領インド調査を円明院や柱本瑞雲宛の私信によって整理したものである。

(d)「柱本瑞俊、1910年の英領インドからの欧州行」(仮題)

柱本瑞俊のインド調査に連続するヨーロッパ巡遊とシベリア鉄道による帰国までを円明院や柱本瑞雲宛の私信によって整理したものである。

なおこの(a)～(d)作成に使用した資料群を「明覺寺資料Ⅱ群」とする。

(e)「柱本瑞俊、1915年から1923年の海外活動」(仮題)

柱本瑞俊が西本願寺の宗務官僚でなかつた1915年から1923年の間の海外における活動を円明院宛私信などによって整理したものである。ほとんど知られていない光瑞と柱本瑞俊の南洋での活動の様相の一端が浮かび上がることになる。

なおこの(e)作成に使用した資料群を「明覺寺資料Ⅲ群」とする。

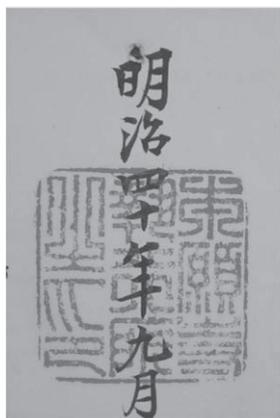
またこれら「明覺寺・柱本瑞俊資料」に加えて、それ以外の「明覺寺資料」も加えて活用すれば、次のような研究が可能となるので提示しておきたい。

【明治期・大正初期、西本願寺宗務官制機構諸印集成】

しばしば指摘してきたように、日本の一伝統教団であった西本願寺は、明治憲法に先立って宗憲(宗派の憲法)を制定し、帝国議会に先立って集会(宗派の議会)を開設し、宗主(門主)を頂点とする近代教団を構築した。明治新政府と競うかのような近代化であったことは疑いない。

しかしその巨大な近代教団がどのような仕組みで動かされていたのか、つまり教団を動かしていた西本願寺の宗務官制機構の実態については、ほとんど触れてこなかった。空白状態にひとしいものであった。しかし今回の調査によって、完成期の宗務官制機構の中で

昇進し活動を続けた柱本瑞俊の詳細な経歴を知ることができた。この柱本瑞俊資料を、西本願寺宗務官制機構によって処理された宗務行政文書と認識すれば、その宗務官制の法制史的研究資料としても活用できるはずである。したがって、柱本瑞俊資料の整理に

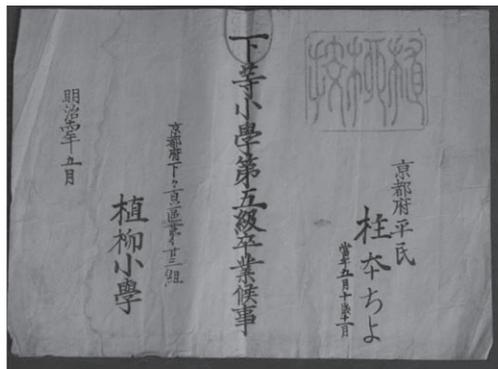


挿5 西本願寺宗務行政機構最高機関「本願寺執行所之印」

並行させて、宗務官制機構の諸印に注目し、吐魯番出土文書研究や外務省外交記録から学んだ研究手法も導入し、先ず諸印の集成から手がけることとした(挿5)。明治新政府と競うかのように日本近代化に深く関わった近代教団の官制機構である。関心を持って頂ける方を切望しての集成である。この集成は、【柱本瑞俊資料】(a)「安満星・柱本瑞俊仮年譜」と連動するものとなる。

【明治期・大正初期の初等中等教育資料】

安満星の鹿児島時代の初等教育(1901・明治34年)、京都における初等中等教育(1901・明治34年以降)に関する公立学校の証書類は、ほぼ漏れることなく揃っており、これに明覺寺関係者の京都市における初等中等教育の諸資料を合わせれば、明治初期の学制発布以降の公立学校の証書類は、充実度が高いとしてよい(挿6)。また明治新政府の学制発布と並行するかのよう



挿6 1881(明治14)年下等小学校卒業証書
明覺寺資料より。

教校や、1912(大正元)年に、第四仏教中学を移設して神戸市に創設された武庫仏教中学(柱本瑞俊が教員として勤務)、つまり私学における初等中等教育資料もよく揃っている。したがって「明治期・大正初期の公私立初等中等教育資料」として一括して紹介したいと考えている。学校教育史の専門家の協力を仰ぐためである。

その他の明覺寺資料の中で現時点で見いだしている注目されるものを紹介しておく。

【九条武子資料】

西本願寺第21代法主・明如(大谷光尊)の次女・九条武子(1887~1928)は、大谷光瑞の妹である。宗門内部では、仏教婦人会活動のリーダー、宗教歌人、あるいは、京都女子大学の創設、関東大震災時における



挿7 上村松園の武子のスケッチ

救援活動などが中村麗子等編『上村松園展』(日本経済新聞社、2010)、166頁のS24。が、武子が、上村松園を師とし、日本画を画いていたこと、あるいは上村松園も武子をモデルとしていたことなどはあまり知られていない(挿7)。

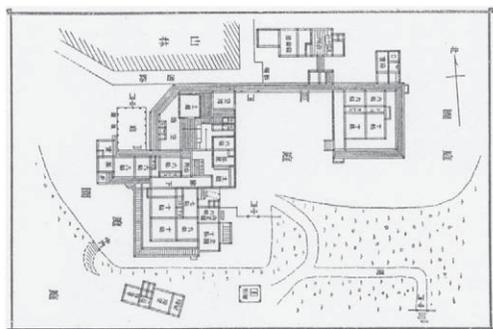
『桃源山 明覺寺誌』には、武子の画いた日本画が紹介されているが、今回の調査で巡り会うことができた(挿8)。それは、「九条武子夫人 扇面おた福」と書かれた桐箱に納めてあった。すでに述べたように柱本



挿8 武子の日本画
明覺寺資料より。

瑞俊と武子は円明院のもと錦華殿とともに成長した人であり、「九条武子資料」は明覺寺資料のなかに意識化して調査しようと考えている。九条武子という人物を日本近代史の中で歴史的にどのようにとらえていくのか、それを課題とするからである。武子も光瑞と同様に、歴史を舞台としてもっともっと語られなければならない重要な人物と認識している。もちろん宗教歌人としての視点も内包させて。武子の夫・九条良致の新たな資料を見出し、良致の検討を開始した門司尚之（広島大学大学院教育学研究科M2）と並行させる幅広い武子研究も意図している。その一端は、各地の仏教婦人会主催の「如月忌法要」（武子の祥月命日法要）の講演などになどにおいて、すでに何度か提示している。

【明覺寺伽藍と茶室・杏林庵】



挿9 三夜荘図

『明如上人伝』（編纂代表・前田慧雲、1937）巻頭図版より。茶室は図の左端（庭園に面した西側の二間）。

共同調査の過程に、明覺寺の寺院建築としての特異性も浮上した。それは、境内の老朽化した茶室の扱いが切っ掛けである。瑞俊が「杏林庵」と名付けたこの茶室は、もともとは西本願寺第21世・明如（大谷光瑞の父・光尊）の別邸・三夜荘の茶室に由来するようで（挿9）、『桃源山 明覺寺誌』にも記載がある。

この三夜荘は、幕末・明治期の隠れた歴史舞台の一つであり³⁷⁾、また大谷光瑞と大谷隊に係わっては、1908（明治41）年、光瑞の招聘を受けて来日したスヴェン・ヘディンは、西本願寺だけではなくここにも宿泊した³⁸⁾。柱本瑞俊は、管轄委員としてこの三夜荘の修復を担当したこともあり³⁹⁾、明覺寺のこの茶室もはなはだ興味深いものである。

加えて文化財建築学の専門家から次のような提起を受けた。1896（明治29）年、現在の境内地に建立された明覺寺が、書院を取り込む寺院建築であるだけでなく、京都の町屋の建築様式を内包させ、これに茶室、土蔵を追加して一体化させたもので、茶室だけではな

く明治期の京都の特異な寺院建築として関心が持たれるべきだと。また当寺の本堂の障壁画も西本願寺書院の障壁画との比較が必要であると。清水寺、西本願寺、東寺などの寺院建築の修復に携わってきた菅沢茂からの提起である。なお明覺寺資料のなかに、建築当初の図面を見出せたのは、この提起があったからである。引き続いて菅沢が担当する。

おわりに

以上が、柱本瑞俊資料と明覺寺資料の共同調査の現状である。大谷光瑞との関係も極めて深く今後の調査も期待される資料群であり、中間報告として発表することとした。それは資料の全容の把握をめざして、今後の調査研究計画を立てるためである。したがって当面は、調査をおまかせ頂いた柱本めぐみ住職と協議しながら、広島大学と新潟大学の共同調査を先行させ、各方面の専門家のご意見をたまわって調査のよりよい方向性も模索してゆきたい。

近年、近代仏教史や大谷光瑞・大谷隊への関心の高まりから関係資料の調査活動が活発化している。それは喜ばしいことではあるが、反面、問題点も生じ始めている。調査継続中の資料、研究中の資料、あるいは調査資料の保管、保管された資料の活用もあり方、また発表論考の利用のあり方などに一定のルールとモラルが求められる状況となっている。大谷光瑞・大谷隊に関心を持つ研究者が学会を組織して、研究発表の場とするとともに、こうした現実的問題も討議されることが望ましい。

【註】

- 1) 大谷探検隊の概略とその活動の様相は多様であるが、ここでは最新の私見を提示した一覧表「20世紀初頭の日本のアジア広域調査活動・大谷探検隊」による。拙著2012、「はじめに」xvi頁。なお「大谷探検隊」は、以後「大谷隊」と略称する。
- 2) 第二次大谷隊インド隊における柱本瑞俊の行程の記録は一部が残っているが、『新西域記』に収録されなかったため知る人は多くはない。上原1935の「随員柱本瑞俊の報」がそれであるが、手に入りにくい。
- 3) これらの諸点に係わっては、拙著2012、52、88、91、121、159、167、168、169、171、216、217、224、275、278、324頁を参照。
- 4) 柱本瑞俊について触れた最初期は、2002年、京都で開催された「草創期の敦煌学 羅・王両先生東渡

- 90周年記念日中共同ワークショップ」と並行する「敦煌学の昨今、今日、明日」における発表と、同年、北京で開催された「国際敦煌学学術史研討会」における発表である。両発表は、論文とし、後、拙著2012の第四編第一章「京都における敦煌学の興隆と第三次大谷探検隊」と同編第二章「第三次大谷探検隊員・橋瑞超の消息不明とその探索」に収録した。
- 5) 院生は、「平成24年度卓越した大学院拠点形成支援補助金事業博士課程後期学生研究支援プログラム」による出張。
- 6) 『桃源山 明覺寺誌』106頁。
- 7) 『桃源山 明覺寺誌』35頁。
- 8) 「安満」を「阿満」と書き誤った例が散見するので注意が必要である。明治40年9月16日付の「准稟綬五等」を授与する西本願寺の職級辞令においても、「阿満」と誤っている。別稿「安満星・柱本瑞俊仮年譜」を参照。
- 9) 柱本瑞俊資料には、同一日付でないものがある。ここでは明覺寺資料に見出した戸籍によった。
- 10) 『図書新聞』に7回にわたって連載した(2003.8.9～9.27)。この他、次の拙稿も参照。「与謝野鉄幹と隠れ念仏」『中国新聞』2003.8.15。
- 11) 宮崎円遵「与謝野礼巖」『本願寺派勤皇僧事』1944、83～92頁。資料的根拠は提示されていない。
- 12) 前掲『図書新聞』拙稿も参照。
- 13) 『性応寺史』89頁にもその写真は掲載されていることから、性応寺のものからの複製かもしれない。ただし性応寺のものは未見であり、想定である。
- 14) 『性応寺史』77頁、79頁。
- 15) 『性応寺史』80～82頁。
- 16) 「国子」とされることは多いが、明覺寺資料に見出した戸籍には「くに」と記載されている。
- 17) 『性応寺史』6頁以降を参照。
- 18) 資料の移録は、別稿「安満星・柱本瑞俊仮年譜」を参照。
- 19) 資料の移録は、別稿「安満星・柱本瑞俊仮年譜」を参照。
- 20) 「4. 資料整理と研究への展望」に述べる。
- 21) 別稿「安満星・柱本瑞俊仮年譜」を参照。
- 22) 資料の移録は、別稿「安満星(柱本瑞俊)の英領インド調査(1907年～1909年)」を参照。
- 23) 柱本瑞俊「現在の王舎城」『二楽荘講演教師及試験試験問題解釈』出版年次不明、9頁。龍谷大学大宮図書館蔵。
- 24) この絵はがきに出合うまでは、柱本瑞俊の言を無条件に採用することには不安があった。柱本瑞俊のインド調査は、第二次大谷隊の時だけと思い込み、安満星としてのインド調査を内包させることが出来なかったからである。
- 25) 『教海一瀾』の外信欄に掲載されている安満星「ラダーク(Ladark)旅行記」(448号と449号、明治42・1909年)は、この時の記録であり、安満星の私信と対応する。これも先に触れた別稿「安満星(柱本瑞俊)の英領インド調査(1907年～1909年)」において報告する。
- 26) 資料の移録は、別稿「安満星(柱本瑞俊)の英領インド調査(1907年～1909年)」を参照。
- 27) 拙著2012「はじめに」xvi頁の表0-1「20世紀初頭の日本のアジア広域調査活動・大谷探検隊」の第二次大谷隊の項。
- 28) 拙稿2011、274～276頁。
- 29) 拙著1992、207頁。
- 30) 拙著2012の「おわりに」に、「次々と課題枠を広げていく「大谷探検隊」を前に、どのような境界を以て大谷探検隊の区切りとすべきか、とまどいをかくし切れない」(337頁)と述べておいたが、早くもその事例に遭遇してしまったようである。
- 31) 1902(明治35)年11月16日付の安満星の度牒の1909(明治42)年12月7日の背面追記。
1 明治四十一年八月十九日 改姓
2 明治四十二年二月八日 改名 柱本瑞俊
3 明治四十二年十二月七日
- 32) 柱本瑞俊と和気善巧は、ともにインドへ向かった。拙著2012では、出発日は、和気善巧「竜樹天親両菩薩遺跡探査」(『新西域記』上巻、123頁)によって、7月27日としたが(88頁)、8月27日とする記録も併存する。柱本瑞俊「印度随遊小記」(『新西域記』上巻、212頁)。上原1935、115頁。日付が一致して月が異なっているだけであるから単純な誤認のようで、8月27日と訂正したい。
- 33) エジプトよりインド政庁へ郵送した報告書があったことは、柱本瑞俊が触れている。前掲拙著88頁の註33。
- 34) 関係諸資料は、別稿「安満星・柱本瑞俊仮年譜」を参照。なおこれとは別に、後述する【明治期・大正初期の初等中等教育資料】にも収録したいと思っている。
- 35) この期の海外事業の様相を概観して全体像を提示しているのは、次の論考である。加藤斗規「大谷光瑞と南洋」柴田幹夫編『大谷光瑞とアジア』(勉誠出版、2010)、248～269頁。
- 36) 『桃源山 明覺寺誌』。
- 37) 三夜荘の由来と来訪した人々については、『明如上人伝』(前田慧雲、1937)、984頁を参照。

- 38) ヘディンと大谷光瑞については、研究論文集を用意しているので、それに譲る。
- 39) 別稿「安満星・柱本瑞俊仮年譜」の1926（大正15）年を参照。

【文献目録】

上原（1935）上原芳太郎『光顔院和子夫人』興教書院、316頁。

拙著（1992）『忘れられた明治の探険家 渡辺哲信』中央公論社、220頁。

拙著（2012）『大谷探検隊研究の新たな地平—アジア広域調査活動と外務省外交記録—』勉誠出版、384頁。

拙稿（2011）「外務本省に提出された西藏問題に係わる一報告書—一九一一年（明治四十五）?二月十三日、西本願寺が提出した報告書の紹介とその解説—」（白須淨眞編）『大谷光瑞と国際政治社会—チベット、探検隊、辛亥革命—』勉誠出版、263～297頁。